

# 早期教育について

長尾 みゆき      村上 昌美      元木 順子

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

## 概要

元来、「子どもは遊びの中で育つ」と言われているように、子どもは遊びの中で様々な事を学び、遊びと並行して所謂「習い事」を幼少期に経験することで社会性や自主性、知能・知識を身に付けるものであった。そして、それは子ども自身が習い事に興味を示したり、大人が子どもに社会性を身に付けさせる為であり、現在、大人となった私達はそれを懐かしい経験として有しているはずである。しかしながら、近年では「遊びや習い事」の文化から「親が率先して行う早期教育」へと状況が変化している現状である。このような変化について、「時代の変化」の一言で片づけることは簡単なことであるが、この変化が子ども達にどのような影響を与えるかについて、大人として真剣に考える必要があるのではないだろうか。そこで、本研究では早期教育の歴史や現状を明らかにしていくと同時に、どのような利点や問題点があるのかについて、また、今日において早期教育が求められる理由や今後の課題について日本と世界を比較しながら考察していくことにする。

## 1 章 早期教育とは

最近、受験戦争の低年齢化に伴い、テレビや書店等で幼児を対象にした幼児教室や早期教育を謳った広告等を目にするようになってきている。早期教育とは、脳が柔軟なうちに子どもの知的好奇心を促進して、高い吸収力や順応能力を持つ幼い間に教育を開始することで脳の活性化を高め、優秀な人間を育てるという理念に基づいて行われる教育のことである。では、具体的にどのような教育が行われているのであろうか。そこで、この章ではこれまで行われてきた早期教育の歴史や実態、および、世界における早期教育の位置づけについて詳しく述べていく。

### 1.1 節 早期教育の歴史

早期教育は江戸時代(1603~1868)、またそれ以前にも存在していたと言われている。当時は教育者でもある親自身が手ほどきを行い、親戚や知人のもとに奉公に出して、将来就くであろう職業に関わる教養や訓練、または、躰として幼少より学問を修めさせていた。それが明治時代(1868~1912)になると年齢を基本に学年制が確立することにより、義務教育機関における早期教育は一端終焉を迎えた。しかし、1970年代に井深大氏の『幼稚園では遅すぎる』という本が火つけ役となり「第一次早期教育ブーム」が始まることとなった。井深氏はその書籍の中で、大脳生理学に基づく「どの子ども、0歳児からの育て方ひとつで能力を伸ばしていける」という早期教育の勧めを主張した。

「第一次早期教育ブーム」は高度経済成長の後押しを受け、主に人材育成や才能教育といった教育を推進したが、1980年から実施されたゆとり教育によって「第一次早期教育ブーム」はほどなく10年で幕を閉じることとなった。

1990年代になると少子化傾向に拍車がかかり、出生率が1.5人まで減少した。そして、子どもの数の激減を予測した教育産業が幼児の教育対象年齢を下げたことが起因となり、中高で受験がないエスカレーター式の私立幼稚園・小学校の人气が高まった結果、その受験テクニックを習得できる早期教育に関心が再び集まることになった。これが「第二次早期教育ブーム」の先駆けであり、1990年代に再び幕を開けた早期教育は現在も続いているのである。

## 1.2 節 日本の早期教育

日本では早期教育と言うと主に「超早期教育」と「幼児・就学前教育」の二つを指す事が多い。超早期教育とは、子どもが胎児期から乳児期の頃に主に脳に刺激を与えるような活動(例：国語・外国語の音声、良い音楽を聞かせる等)を通じて行う教育のことである。また、幼児期・就学前教育とは、小学校に就学する前の幼児に対して文字の読み書きや計算、外国語等の教育を施すことである。子どもにとって、親による絵本の読み聞かせや遊びも教育であるが、ここで言う幼児期・就学前教育は体験認知型(日常生活を通して身に付く概念)ではなく、パターン認知型(市販の教材や幼児教室などで獲得した知識)のことを指している。そして、教育の内容については前述の幼児・就学前教育と同様に、主に小学校入学前の先取りの教育を行う「知育重視型」、ピアノやバイオリン等の音楽、絵画等の教育が主に例として挙げられる「芸術志向型」、そして、バレエや水泳、そろばん等の教室に幼児期から通わせる「習い事型」の三つに分類される。

近年では子どもを乳児期から、または、小学校の頃から英語環境に浸らせる「早期英語教育」を行う家庭や学校も増えてきており、その為の教材(CD、ビデオなど)が多く宣伝され、更に、文部科学省がパソコンでの教育を推進したことにより、パソコンを使った乳幼児向けの教材も販売されている。また、習い事型の教育における幼児の習い事についてはスポーツ関係が多く、体育教室やリトミック、更にはサッカー等を教える施設も増えてきた。

## 1.3 節 世界の早期教育

現在、世界の非英語圏全域で義務教育としての英語教育の開始年齢が前倒しされる傾向にあり、どの国の保護者もそれよりもさらに早くから子どもに英語教育を受けさせようとしている。例えば、英語力の有無がそのまま収入のバロメーターとなる韓国では、胎教は当然のこと、英語を話すベビーシッターを雇ったり、わざわざ母親と子どもだけがアメリカに移り住んだりする等、非常に英語教育に熱狂している。更に、幼児対象の「英語学院」が新規開設されて多くの未就学児が通い始める等、幼稚園で小学校の英語授業内容を上回る水準の英語授業が開始される現状となっている。次に、ヨーロッパに目を向けてみると、フランスでは日本の幼稚園よりも早い2歳から「母親学校」と呼ばれる学校に通い始める。そこでは、物や形の絵柄を見分けることから始まり、次第に文字の読み書き計算へと段階を踏んで進んでいく。また、イギリスでは無償の就学前教育が行われており、2~4歳向けの保育園、4~7歳向けの幼稚園に併設された保育学級があり、この段階からしっかりと教科教育が始まるのである。

一方、宗教が影響することにより早期教育に繋がっている国もある。ユダヤ社会のイスラエルでは、これまで学術・芸術のあらゆる領域で優れた先人を生み出してきたという自負がある為、幼児期から熱心に教育を行っている。元々、ユダヤの子ども達はユダヤの律法や宗教について長い時間と労力をかけて学ぶ必要があり、その教育を担っていたのは近親の年長者等であったという伝統から、親が子どもに勉強を教える為の補助教材が豊富に開発されているのがイスラエルの特徴である。それをういて各家庭で幼児教育が行われていることから、個々の家庭の持つ教育能力がとても高い為、イスラエルが世界で最も教育熱心な国であると言われているのである。

## 2 章 早期教育の利点

幼児は胎児の時から既に様々な能力を備えており、誕生後に驚くほどの速さで脳が発達する為、多くのものを吸収し易い時期と言われている。よって、生まれて間もない時期からリトミックやスイミング等の習い事を始めることは、「脳を鍛える」「脳の発達を促進させる」という観点から子どもの発達に大変良い影響を与えるのである。早期教育はこれらを目的として幼児期に行わ

れる教育方法であるが、実際のまたは具体的な早期教育の利点としてはどのようなものがあるのかについてはあまり知られていない現状である。そこで、この章では早期教育の利点を日本と世界に分け例を挙げながらその魅力に迫っていくことにする。

## 2.1 節 日本における早期教育の利点

乳幼児期は刺激を脳へ吸収する力が優れており、この時期だからこそ発揮される能力があるという事が近年の研究により分かっている。早期教育には主に勉強に慣れさせる為に塾に通わせる事やスイミング教室に通わせる事等が挙げられるが、これは吸収力が抜群な時期に様々な刺激を与える事により、脳を鍛え、発達を促進させる事によって子どもの潜在能力を引き出して才能を開花させるという考えが根底となっている。そこで、ここでは日本国内で特に盛んに行われている「英会話」「スイミング」「武道」の三つについて述べていく事にする。

一つ目に挙げた英会話には、早くから習うほど自然と身に付くのが早くなるという利点がある。現在では殆どの学校で英語の授業が行われるようになり、小学校でも英語の授業が取り入れられるようになってきているが、乳幼児の頃から早く英語を身に付ける事により、小学校や中学校に上がっても授業に遅れる事なく楽しんで勉強できるという利点に繋がる。また、英会話を習っていると外国人講師等と触れ合う機会が多くなり、実際に現地の人と交流をする事や実用的な英会話が話せるようになり、海外でも実際に外国人と接する事ができたり、学校の授業等ではヒアリングやスピーチのレベルも上がる事へと繋がっていくのである。加えて、外国の言葉を学ぶ事は異文化に触れるという事にも繋がり、日本とは違った文化に触れる事で子どもにとって良い刺激を与える事ができるのも英会話の魅力の一つである。二つ目に挙げたスイミングには、子どもの体力を鍛えたり、水泳に慣れ親しみ、学校の水泳の授業を楽しく受ける事ができるようになる等の目的が多く挙げられる。また、スイミングは喘息やアトピー等の症状にも効果を発揮すると言われている為、喘息やアトピー等の症状を持つ子どもの親が症状を改善する為にスイミングを習わせるという場合もある。他にも、スイミングには以上のような身体的な利点だけではなく、体を動かす事によってストレスを解消する事にも役立ったり、親子でスイミングを習う場合にはコミュニケーションの活性化にも繋がる等、精神に与える利点も挙げられる。三つ目に挙げた武道は、「礼に始まり、礼に終わる」を基本としている為に始めに「礼儀」を徹底的に教わる。この「礼儀」を子どもの頃にしっかりと身に付ける事により、将来大人になり社会に出てからもきちんと礼儀をわきまえた行動が出来るようになる。さらに、体を動かす事により「身体を鍛える」事へと繋がり、武道は「精神力」と「身体」の両方が鍛えられるという利点が挙げられる。そして、それらが結果として子どもがより良く成長していく事に繋がっていくのである。

## 2.2 節 世界における早期教育の利点

日本での早期教育の利点は前述したとおりであるが、その一方、世界での早期教育の利点とはどんなものがあるのだろうか。

世界の大半の国で行われている早期英語教育では、幼児期から英語に触れることで外国人とコミュニケーションがとれるようになる為、異文化を深く知ることにより人間性が豊かになったり、母国語と英語の二つの表現を知ることにより柔軟な思考が出来るようになったりする。そして、将来的にみても受験勉強や就職の際の苦労が軽減され、職業選択の幅も広がり社会的地位の確立にも繋がる等という利点が挙げられる。

一方、宗教が関係していることから早期教育を行っている国も少なくはない。イスラエルでは幼児期からユダヤ教による徹底した道徳教育を行っている為、非行や非道徳的な行動をとる子どもは極めて少ない。そして、生涯を通してユダヤ教を学ぶことによって、大変優秀な才能を得ることに繋がっているのである。その理由は、イスラエルは国土が狭く天然資源もそれ程豊かでは

ないことから「人こそが国の宝であり、経済の原動力」と考えられており、その為、教育に国を挙げて力を入れて優秀な人材を育てているのである。しかし、早期教育はただ単に優秀な人材を育てる為だけに行われているのではない。質の高い早期教育は子どもの認知技能、言語能力、情緒的・社会的な発達を促す大きな可能性を秘めている。更に、学業成績を上げることに役立ち、幼い時から子どもを不利な立場に追いやることを避けることができるのである。

このように、早期教育は子ども達の技能的・情緒的な面で発達を促すと共に将来の地位の確立に役立っていると言えるのである。

## 2.3 節 早期教育が求められる理由

現在日本は、「第二次早期教育ブーム」の真只中である。多くの親が早期教育に引き込まれる主な理由として、学校教育に対する不安・不満、ゆとり教育に対する反動、子育てに対する不安・自信の喪失、少子化による一人一人の子に対する期待の高まりや金銭的ゆとりの増大等が挙げられ、多くの親は子どもに年齢に囚われず自由に教育を受けさせ、且つ、将来の可能性を無限大に広げ、個人の持つ能力を最大限に引き出したいと思っている。それは学習面に限らず、独創性、社会性、情緒性を高める為の教育も含まれている。すなわち親にとって早期教育は「不安の解消＋未来における成功＋信じたい」という存在なのである。

具体的な早期教育として、大人になってから完全なる発音をするのは難しい英語の発音やヒアリング、音楽においては絶対音感等のように小さい頃からでなければ身に付かない早期教育が挙げられる。また、早期教育は子どもとの関わりのきっかけのひとつとしても使われている。例えば、早期教育が親子関係を仲立ちして子どもと過ごす時間が長くなり、子どもにとっても親と一緒に頑張ることが出来る等、親子の絆が深まる等の良い影響を与える場合もある。また、時には勉強をさせすぎてしまう等の失敗もあるが、親子が向き合う時間も増え、親子一緒に成長する事が出来る等、早期教育は子どもだけのものではなく、親に対しても大切な教育となっているのである。

## 3 章 早期教育の問題点

これまで述べてきたように、早期教育には早い時期から能力を身に付けられるだけでなく、精神面や体面にも良い影響を与えられるという利点がある。しかし、その反面で早期教育が子どもの心理や人格に悪影響を与えているとも言われている。そこで、この章では早期教育が子どもの心理や人格にどのような影響を与えるのかを述べていくことにする。

### 3.1 節 日本における早期教育の問題点

早期教育により子どもから「本来の遊び」が無くなる事が懸念されている。「本来の遊び」とは、子どもが自発的に作り上げていく遊びの事であり、その遊びの中で知能や思考力等の様々な事を身に付けるのである。また、集団で遊ぶ事で順番等のルールを守る事の大切さを学び、仲間とコミュニケーションを取ることで社会性も身に付ける事ができるのである。しかし、早期教育における「遊び」は準備された活動を受動的に受け入れる事で成立する世界であり、子どもが自ら遊びの中で思考力や社会性を身に付ける機会を奪ってしまい、その結果、共同作業が苦手になったり、協調性の無い自分勝手な子どもに育ってしまう危険性が懸念されているのである。その他にも、早期教育を行う事で子どもの自主性や自己肯定感を抑圧させてしまう事も懸念されている。

早期教育には、パターン化されてそれに反応するという受け身の学習・訓練が多いが、その為に子どもは自発性や自主性、そして、創造性の領域の発達が抑圧され、どのような事に対しても

受け身の姿勢になってしまう可能性がある。また、早期教育を受けていると親からの期待に応えようとする子どもが殆どとなり、親からの期待や評価を気にするあまり、子どもは「親の期待に応える子は良い子で、応えられない子は悪い子」と考えてしまうようになる。その為、幼児期に育つはずの「自分は自分で良い」といった自己肯定感や自尊感情を失ってしまう危険性も懸念されているのである。

以上のように、早期教育には子どもの人格や心理に関する問題点が多く挙げられるが、他にも教育費による経済的な面での問題点も生じている。昨今の早期教育ブームの中、乳児期から幼児教室や英語教室に通わせる為に多大な教育費をかけているケースが多く見受けられるが、その多くは手取りの月収が20万台のごく一般的な家庭である。このように、早くから早期教育の為に費用をかけ過ぎると、本来必要な生活費や子どもの将来の為の教育費が賄えなくなる可能性がある。実際、大学教育にかかる教育費が家計や貯蓄から賄えず、奨学金や教育ローンに頼る家庭が昨今増加している現状であり、早期教育ブームがそれに更に拍車をかけてしまう恐れが心配されている。よって、早期教育に意義があるとしても、一般的な収入の家庭が早期教育に費用をかけ過ぎると、子どもの将来の教育費が不足するだけでなく、老後の生活にも影響を与えてしまうという現実があるという事を考えなければならないのである。

### 3.2 節 世界の早期教育の問題点

ここでは、大半の国で行われていると言える早期の言語教育に焦点を当て、韓国とフランスを例に挙げ述べていくことにする。

初めに、韓国で早期英語教育に力が入れていることは第1章の1.3節でも述べているが、その理由は国家競争力を高めるために、国際的に通用する優秀な人材を養っていく必要があるからだと考えられている。その為、政府レベルで英語教育に力を入れており、1997年から小学校3年生以上は英語の授業が必修となっている。さらに、3年生からでは遅いという世論の後押しもあり、小学校1年生からの必修化を視野に、試験的に英語の授業を実施していく計画が立てられている。それに加えて、家庭でも4、5歳から何らかの形で英語教育を始めるのが一般的で、その時期は年々早まる傾向にあると言える。そうすると自然と英語教育への投資額は高くなる一方であり、年間の英語教育費は15兆ウォン（日本円で約1兆9000億円）に達すると推定され、1人当たりの教育費は日本の7.8倍に当たるとされている。韓国では“子どもの英語力は母親の努力次第”と言われる程で、ストレスを感じる母親も多く、経済的に見ても負担は大きい。また、英語教育熱は専業主婦の家庭だけに留まることを知らず、共働き家庭が増えている韓国では、「英語育児はしたいけど、時間がない」と悩みを抱える母親に代わって、「かわいい孫のため」とひと肌脱いで、英語育児を実践する祖父母も出てきている。更に、夏休みや冬休みを利用した短期留学だけでなく、小中学生の子どもを外国の学校に通わせるため、父親だけが韓国に残って仕送りする家庭も増えており、それが家族崩壊につながるケースも出てきているため、新たな社会問題にもなっている。

次に、フランスの言語教育に目を向けると、韓国と同様に英語教育についての問題が伺える。フランス国民教育省は、2000年より幼稚園年長（5歳）より3年間の入門教育（週1回90分）を実施することとなったが、これはあくまでも異言語に親しみ、母語以外の言語を発話する喜びを味わうことで、母語のより良い理解を深めることが目的としてある為、言語教育を英語に限定せず、複数言語の中での選択が可能となっている。しかしながら、言語の選択に関しては英語のように社会的ニーズの高い言語は中学校以降に必ず学習する機会があることから、むしろ学習の機会の少ない、英語以外の言語の学習を促進することが妥当であるにも関わらず、英語以外の言語を学ぶ意義は家庭や地域社会に十分に浸透しておらず、また、多くの言語種が全ての学校で整備されていないことや英語以外の言語教育を担当しうる教員が乏しい等、様々な要因により英語の独占に拍車をかけている現状となっている。

このように、フランスでは言語教育の多様化を推進して英語の独占を防ぐこと、この2点の課題が明確であるにも拘らず、複言語教育の整備は英語の特権化を未だ阻止出来ず、英語との戦いは教育全体の課題となっているのである。

### 3.3 節 今後の早期教育の課題

生まれてから3歳までに脳の重さが急激に多くなることは確かなことであるが、神経細胞の網である「構造」が構築されるだけであって機能が発達するわけではない。よって、未熟な脳に特定の情報を送り込み過ぎると、これから学習する為に用意されている領域まで使ってしまうことになるのである。子どもの思考力は本来遊びの中で想像力や創造力を豊かにして頭脳を活発にする為に発達していく。そして、集団で遊ぶことによって規則という概念を持つことができ、時には集団の中で子ども同士の衝突もあるが、友達の気持ちも分かるようになり、社会性等の多くを学んでいくのである。

現在行われている早期教育は、教材を開発するにあたって遊びを取り入れてはいるが、子ども本来の遊びと早期教育の中での遊びでは本質が違っている。本来子どもの遊びは、子ども達自身が自発的に作り上げていく世界であり、早期教育の中の遊びの場合は準備された遊びを受動的に受け入れることによってのみ成立する世界である。さらに、集団での遊びが減ることにより協調性に欠け、共同作業が苦手になる危険性がある。そして、早期教育はパターン化されているものに子どもが反応するという受身の学習・訓練が多い為、子どもが受身になり、子どもの自発性や創造性の領域の発達が抑圧される危険性も懸念される。

現在進められつつある早期教育は、幼児たちの視覚と聴覚をコントロールしながら大人たちが仕組んだ「意味」のある教材のメニューを幼児自身が選んだかのような錯覚を持たせながら従順に反応させていく特徴がある。例えば、「言葉が話せる」とか「数がわかる」という目に見える事柄のみを切り離して、「教え込もう」とすることにより、見に見えない「心が育つ」過程をおろそかにしている。すなわち早期教育が考える「能力観」には「人間観」が欠如しているのである。そして、親の期待に応えることができる子が良い子、期待に応えられない子はダメな子、というように自己肯定感を喪失し、また、努力するのは自分の為ではなく大人を喜ばせるためであり、自分らしさを失ってしまう危険性もある。遊びは幼児にとって欠かせないものであり、よって、毎日を健康に楽しく暮らせる事の方が幼児にとっては大事なことなのである。これからの乳幼児教育は、おもちゃ、絵本の読み聞かせ、自由で豊かな模索活動の3つを柱にして構想されることが求められており、もし早期教育を始めるとしても、それが子どもの「育つ」力を妨げないことが条件となるべきである。そして、無理矢理の押し付けではなく、自然に意欲をもって学べるように工夫し、子どもの発達段階を考えて無理なく親と子が楽しくコミュニケーションをとれるようなものが望ましいことは言うまでもなく、すなわち、今進められつつある早期教育システムは成功の鍵があると同時に大きな落とし穴があることを忘れてはならないのである。

## まとめ

早期教育は日本だけでなく、韓国やフランス、イスラエル等の世界各国でも行われており、教育の内容は知的教育やスポーツの他、宗教教育等、国によって様々な特色がある。但し、日本も含めて殆ど国で共通して英語等の外国語教育が行われており、その目的として海外への社会進出や英語力の向上等が挙げられている。しかし、外国語教育については問題点を抱える国が多く、経済面や家族関係の面で社会問題にまで発展している事例もある。また、外国語教育に限らず早期教育自体にも問題点が存在しており、パターン化された教育が子どもの心理や人格形成へ影響を及ぼす事も問題視されている。

一方、宗教教育やスポーツ等、精神面や肉体面を鍛える事を目的に行われている教育は成功を収めている場合が多く、また、外国語教育についても問題点ばかりではなく、実際に技能の向上や社会進出に繋がっている事例もあり、早期教育が子ども自身や子どもの将来にも良い影響も与えているという事実があることも忘れてはならない。

外国語教育に限らずその他の教育においても、子どもの自主性を尊重して親子のコミュニケーションをしっかりと行う事、そして、何よりも教材や塾等で用意された教育を行う前に絵本の読み聞かせや遊び等の日常生活を通して多くの事を体験して学ぶ事が子どもには大切であり、子どもが楽しく安心して学べる環境を与える事が大人にとっての今後の課題であり、それが子どもがより良く成長していく事に繋がっていくのではないだろうか。

## おわりに

この論文は中村学園大学短期大学部 幼児保育学科 橋本弘治研究室において2008年から2011年に作成した卒業研究論文です。当研究室では卒業研究論文集を「幼児保育」と中村学園の学園祖 中村ハル先生の遺訓「努力の上に花が咲く」を組み合わせ「中村学園大学短期大学部「幼花」論文集」（以下、「幼花」論文集と記す。）と名付けております。但し、これは中村学園大学短期大学部としての正規の発行物ではありません。「幼花」論文集は当研究室にて作成した卒業研究論文の論文集です。

卒業研究論文は2008年より当研究室のホームページにて概要のみを公開しておりました。また、「幼花」論文集は卒業生への配布を目的として、基本的には非公開を前提として、パスワード保護により当研究室のホームページよりリンクしておりました。但し、個別にお問い合わせを頂いた教育・研究機関の関係者にはご理解頂いた上でお渡ししております。

この度、2018年8月現在においてパスワード保護が何らかの理由で解除され、「幼花」論文集が一般公開されている事実を確認いたしました。この事実に関しまして、ホームページを公開する者として管理不行き届きがありましたことを心よりお詫び申し上げます。

これまでリンク元である当研究室のホームページより論文へアクセスされた方はご理解された上でご覧いただいていると思っておりますが、それ以外の経路により直接論文へアクセスされた方には誤解を生じる論文集の名称であることから、この度、この文面を「幼花」論文集のすべてに追記することにいたしました。また、これまで卒業生への配布と総合演習（卒業研究）発表会での使用を前提としておりましたので、著作権表示として「中村学園大学短期大学部」と表記しておりましたが、「お問い合わせ先」と変更しております。尚、「幼花」論文集の詳細についてはリンク元である当研究室のホームページをご覧ください。

<http://www.nakamura-u.ac.jp/~hashimot/members/members.html>

「幼花」論文集は保育・幼児教育を中心として、保育者を目指す学生が真摯に取り組んだ卒業研究の成果集です。当研究室としましては、この「幼花」論文集が教育・研究をはじめとして、子ども達を取り巻く環境改善の一助となることを希望しております。

上記をご理解の上、本文をご覧くださいますようお願いいたします。

2018年8月8日  
中村学園大学短期大学部  
幼児保育学科 橋本弘治